

特集

ユニバーサルデザイン WG の活動

—バリアフリーの天文教育普及—

嶺重 慎 (WG 代表・京大基研)

ユニバーサルデザイン WG の活動を概観する。立ち上げから 1 年になる本 WG は、主に ML における議論や意見・情報交換を行っているほか、支部会等でメンバーが集まり、直に議論をするときをもった。WG 設立の経緯、目的、現状、今後を報告する。合わせて、黄華堂で継続している京大病院小児科病棟訪問についても紹介する。

1. はじめに

わたしたちは、2006年8月に天文教育普及研究会・ユニバーサルデザインWGを立ち上げました[1]。そのきっかけは、2005年10月の関東支部会にさかのぼります。支部会の中で、私は出席者にいくつかの質問をしました。その中の一つがバリアフリーに関連するものでした。その後、天文教育普及研究会のメーリングリスト (ML) 上で議論され、WGについて多くの方々の支持を得て、準備期間を経た後、翌年8月の発足に至りました。

WGの趣旨をひとことで言うと、「すべての人のための天文教育普及」ということばに尽きます。視覚・聴覚にしょうがいのある方、長期入院している子ども、養護 (特殊支援) 学校の子どもの含め、幼児からお年寄りまで、天文教育普及の対象にバリアはないはずですが、しかしながら、実際にはさまざまな障壁が作られているのが現状です。いや、われわれ自身がつけている場合もあります。それと気がついていない場合や、先入観によって決めつけていることも多々あるでしょう。もしそうなら、ちょっとした配慮でバリアが取り除ける場合もあるはずですが。

ユニバーサルデザインWGの目的は、「すべての人のための天文教育普及」を目指して議論を深め、実践し、ノウハウを蓄積し、記録にとどめ、多くの方が活動に参加しやすく

なる下地を作ることにより、天文普及の輪を広げていくことにあります。

こうした考え方のもと立ち上がったWGは、結成後1年を迎えました。当初十人ほどで出発したメンバーも今では倍以上になり、日常的にさまざまな議論や情報交換がMLを用いて活発になされています (8月半ば現在で700通超)。また、実践も少しずつですが進められています。ここでは、そうしたWGの現状の一端を紹介します。

2. しょうがい者支援に関する考え方

最近、しょうがいに関する考え方が多様化し、しょうがい者の生活や命を大事にする考え方が次第に浸透してきました。その考え方は、以下の4つのキーワードで表されます。

・「医療モデル」から「生活モデル」へ
しょうがい者は、単に医療・支援の対象ではなく、生活の主体であること。

・ADLからQOLへ

ADL (日常生活動作=Activities of Daily Living) の自立が最大でかつ最終の課題なのではなく、生活を豊かにすること、言い換えればQOL (Quality Of Life=生活の質、命の質、人生の質) を大事にすること。そして、共に生きていること、共に感動を分かち合うこと。

・バリアフリーからユニバーサルデザインへ
単にバリアをひとつひとつ取り除いていくという発想ではなく、初めから、できる限り多くのタイプの人々が共に学び共に楽しむ環境を整えていくこと。

・エンパワーメント

一方的に何かをしてあげるのではなく、一人ひとりが本来のパワーを十分に発揮しつつ、互いに支え合うように環境を整えること。

違いを認め合う社会は、真に豊かな社会といえます。ここでは違いを明確にするためにあえて対立するような書き方をしましたが、実際には、その場合によって、考え方に柔軟性が要求されます。重要なのは理念や主張ではなく、今、目の前にいる人を大事にする気持ちなのでしょう。そして、一人ひとりを大事にする思いは、心の交流をもたらし、支援していると思っている人が、じつは支援されていたことに気づくことにもなります。

3. ユニバーサルデザインWGの活動

3.1. 活動内容

2節であげた考え方をベースに、WGでは以下の3本柱を中心に議論や意見・情報交換をしています。

(1)調査・情報収集

- ・プラネタリウム等施設へのアンケート調査（本誌掲載の尾崎氏の原稿を参照のこと）
- ・しょうがい者とのコミュニケーション（現在、5名の視覚しょうがい者の方がWGのMLに入っていて、随時意見をいただいています。）

- ・基本的考え方についての意見・情報交換

(2)教材開発製作

- ・各種プログラム開発（個々の施設で実施；山梨科学館の例は、本誌掲載の高橋真理子氏の原稿を参照のこと）
- ・バリアフリー本の出版計画（3.3節参照）

(3)実践

- ・病院での観望会・宇宙や星のお話（4節および本誌掲載の林氏の原稿も参照のこと）
- ・手話通訳つき天文講演会（今後の課題）

3.2. 集会等

遠隔地の方もおられ、なかなか一堂に集う機会はもちづらいため、活動はMLが中心ですが、それでも、直接話し合う機会をもつことは大事だと思っています。

近畿地区集会（2006年6月18日、12月10日）、中国四国地区集会（2006年6月25日）、天文学会春季年会（2007年3月28日）、関東地区集会（2007年6月17日）等の機会には、メンバーが複数集まり、メンバー内で、あるいはメンバー外の人とも交えて意見交換のときをもちました。

3.3. バリアフリー本出版計画

点字（点図）の宇宙の本は、日本ではほとんど例がありません。筆者が知る限り、現在、日本で出版されている唯一の本は加藤万里子著「百億年を翔ける宇宙」です。しかし、これは大学生向けで、一般向けにはちょっと難しいようです。米国では、Noreen Griceさんが何冊か出されています[2]。

そこで、この際、天文学の入門的なバリアフリー本を作りたいと、筆者とWGメンバーの高橋淳さんを中心に出版社にコンタクトを開始しています。

追い風は、近年「触る絵本」、「点字の本」が少しずつ増えていることで、「点字つき絵本の出版と普及を考える会」が力を入れておられることが、その大きな理由です。

とはいえ、興業的にはきわめて厳しい状況です。助成金・補助金がなければ、まず不可能です（米国の本は各種助成金に支えられている）。あるいは、一般向けの本を出版して、たくさん売って実績を作り、その後、バリア

フリー版を作成するという手順になります。現在、複数の可能性を追求しているところです。

4. 黄華堂の京大病院小児科病棟訪問

ここで、筆者も含め、黄華堂[3]メンバーが京大付属病院小児科病棟で行っているイベントについて、報告します[4]。

4.1. 経緯等

入院中の子どもにとって、病院は生活の場であり、遊ぶ場でもあります。しかし治療が優先され、子どもらしい生活はおくれないのが現状です。そこで、京大病院の小児科病棟では約60名のボランティアが、ほぼ毎日、さまざまなイベントを開催しておられます。そこで、ボランティアグループにコンタクトをとったところ、とても歓迎してくれ、さまざまな便宜をはかってくれました。

黄華堂はこれまで4回のイベントを、ほぼ3か月毎に行ってきました(2006年10月11日、2007年1月23日、4月25日、7月25日)。いずれも、中身は、夕方のプレールーム編(お話)と、夜の観望会編(7月のみプラネタリウム)とからなります。

4.2. プレールーム編

時間は午後4時半～5時半、場所はプレールーム(6m四方の板敷のコモンスペース)で、参加者は小学生・未就学児が中心で親を含めて10人前後です。(一般に、幼児が多いイベントには中高生は来ないということをボランティアの方から伺いました。)こちらからは黄華堂の4～7人と、有本さんが声をかけた塔南高校の2～6人が参加しています。さらに小児科ボランティア2～4人の方にも手伝っていただいています。内容は、今日の星空、天文クイズなどで、子どもたちは(日頃のイベントに慣れているせい)、始めからリラックスして話にもものってくれ、いい雰囲気です。

た。

小さな子どもには、クイズがよろしい。「マルかバツか」なんてやると、キャーキャー言っていて喜んでくれます。また、天文画像写真も効きます。配布すると、子供たちは目をらんらんと輝かせて選んでいました。

4.3. 観望会編

時間は午後7時～8時、場所は病棟4階コーナーにある待合室風スペースです。南側と西側が大きく開けており、夜空がよく見えます。そこに、望遠鏡と双眼鏡を持ち込み、一方でパソコン、スクリーン、プロジェクターを設置し、4次元宇宙シアター"Mitaka"[5]をセットして子どもに操作してもらいます。参加者は小学生・未就学児から中学生まで、親やボランティア(場合によりお医者さん)も含めると十数人が、毎回集います。

1回目(2006年10月)は全く晴れず。2回目以降(2007年1月、4月)は無事晴れて、月のクレーターや土星の輪を見ることができました。親も含めて、ほとんどの人が最初の体験だったようで、反応は上々でした。

ところで、小さな子どもが望遠鏡をのぞくのは難しいようで、子どもによってはうまく像を見ることができない場合も多々あります。(そんな場合、「見えなかった」とは言わず、ことばを濁してしまうことがあります。)そんなときには、あせらず「必ず見えるよ」とゆっくり励ましなが、落ち着かせて見させてください。うまく見えたら、満面笑みを浮かべて「見えた!」と言ってくれます。

4.4. プラネタリウム編

夏(7月25日)は明るくて観望会ができないため、ドーム+プラネタリウムを実施することにしました。ドームと送風機は、和歌山大学から送っていただいたものを用いました。時間と場所は、観望会のときと同じです。

ドームを膨らませ、中にプラネタリウムをセットして蒸し暑い中で待っていると、子どもたちが続々とやってきました。点滴の子もいるので、入るためのすきまをあける度に空気がもれてドームが縮んでしまいます。ドームを支える手つきも次第に慣れてきました。中は結構暗くなり、星空案内をしてくれた米原さんの解説に、皆、聞き入っていました。

今後も3ヶ月ごとのイベントを継続していきます。

5. WGの今後

WGは、3年間の限定つきで発足しました。これは、3年で必ず終わるという意味ではなく、3年という期間を区切って具体的目標を設定して活動を行う、成果がでなければ（休眠状態になれば）WGを解散する、さらに課題がみえてきたら、プラス3年間、活動を継続するという意味です。

では、この3年間の具体的目標は何かというと、「ユニバーサルデザイン天文教育普及のための『ガイドブック』作り」です。WGメンバーだけが一所懸命ユニバーサルデザイン活動に参加しても、数は限られ、効果も微々たるものです。そうではなくて、天文教育普及に関わる方が、それぞれの場所でそれぞれのやり方で、ユニバーサルデザイン化を実現していくこと、そのためのお手伝いをWGがさせていただき、そこで役立つ「ガイドブック」を作ろうということです。

幸いにして、きわめて活発なメンバーに恵まれ、日常的に新しい議論が沸き起こっています。そのまま埋もれさすのは勿体ないので、別の機会にその議論も発表させていただきま

6. 観望会グループへのお願い

最後に、各所で観望会を主催して（あるいは計画して）おられる方をお願いをします。

ML上の議論から、養護学校等で観望会や天文のお話をしていただけるボランティアグループのリストを地域ごとにつくって活動に役立ててはどうだろうかというアイデアが出てきました。幸いにして、WGメンバー等による病院（主として小児科）訪問活動の事例も増えてきており、ある程度のノウハウもコネもできてきました。観望会を実践している側と、実践してほしい側との橋渡しがそろそろできるかなという状況です。

病院や養護学校等での活動に興味はあるが、ノウハウがわからない、何か特別なことが必要ではないか、コネがなくて実現に至っていないという観望会ボランティアの方は結構おられるのではないかと想像しています。ご協力いただける方は、嶺重まで、団体（個人）名、人数、経験内容、活動地域、興味のある活動をお知らせください。

天文教育普及研究会メンバーにこだわらず、協力していただけそうなグループをご存知の方は、この文章を自由に転送してください。よろしくご協力をお願いします。

参考文献

- [1] 「ユニバーサルデザインWGについて」、嶺重慎ほか、第20回天文教育研究会集録、p.74, 2006
- [2] Noreen Grice著"Touch the Stars" (National Braille Press, 2002), "Touch the Universe" (The Joseph Henry Press Book, 2002), "Touch the Sun" (The Joseph Henry Press Book, 2005), "The Little Moon Phase Book" (OZONE Publishing Corp, 2005).
- [3] <http://oukado.org/>
- [4] 「京大付属病院小児科病棟訪問！」嶺重慎、有本淳一ほか黄華堂メンバー、天文教育 vol. 19, No. 1, p.53, 2007
- [5] 4D2U project; <http://4d2u.nao.ac.jp/>